

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 7章2～4節、9～12節

2わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た。この天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に、大声で呼びかけて、³こう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない。」
⁴わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは十四万四千人で、イスラエルの子らの全部族の中から、刻印を押されていた。

9この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、¹⁰大声でこう叫んだ...

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」

¹¹また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、¹²こう言った。

「アーメン。
賛美、栄光、知恵、感謝、
誉れ、力、威力が、
世々限りなくわたしたちの神にありますように、
アーメン。」

【福音書日課】マタイによる福音書 5章1～12節

¹イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。²そこで、イエスは口を開き、教えられた。

³「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。」

⁴悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。

⁵柔和な人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。

⁶義に飢え渇く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。

7 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。

8 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。

9 平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。

10 義のために迫害される人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。

11 わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。12 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

天上の大群衆【こども説教のために】

今年も、すでに地上の生涯を終えられた先達を憶える記念の礼拝を迎えました。多くの教会は、11月の初めに設けられた「聖徒の日（全聖徒の日）」に合わせて、「永眠者記念」などの呼称で記念礼拝をいたします。わたしたちの教会は、この教会を生み出した親教会の習慣に倣って、「在天会員記念」と称してきました。「天にある者たちの記念」です。

地上の生涯を終えて死んだ者は天に迎えられる、天国に行くと、多くの者が当たり前のように言います。「天に召される」と言う者もあります。特定の宗教を信じてはいないという者であっても、死んだ者の行く先を「天」と言うのは、特別なことではないようです。

もちろん、地上に生きている者はだれも、その「天」に行ったことはありません。死んだ者の行く先が「天」であれば、わたしたちが地上に生きている間は、そこに行くことはないのです。ただ、その「天」を幻の中で見てきた、という者があるだけです。

「ヨハネの黙示録」を記した僕ヨハネも、そのような幻を見てきた一人です。彼は、祈っていたときに天使が現れて、「天」に引き上げられたのです。そこでは、神がお座りになられているであろう玉座とキリストと思われる小羊を囲んで、多くの天使や先達と思われる人々が讃美を歌っていました。大声で讃美の声を上げる多くの白い衣を着た大群衆は、世界中から集められてきた人々のようでした。その人々は、先に死んだ多くの先達の姿でした。

ヨハネは、キリスト信仰のゆえに囚われて離島に幽閉されていたとき、おそらく一人で日曜日の祈りをささげるとき、その幻を見たと言います。わたしたちも日曜日の教会の祈りの中で、その「天」の幻を見るのです。

先達の目指したところ

ヨハネが幻の中で見た「天」の玉座に集まる人々は、その名を一人ひとり呼ぶこともできないほどの大群衆でした。確かに、わたしたちにとって先達と呼べる人々は、数え上げることも、その名を並べてみせることもできないほど、存在するでしょう。たとえ幻で示されても、「天」にある人々のほとんどを、わたしたちは、ただ名もない群衆としてしか見ることができないのです。それは、当たり前前の感覚かもしれません。日本人も古くから、死んだ人は一定の期間が過ぎれば「祖先の霊」と一つになって、個々の存在は消えていくと考えてきました。

けれども、その膨大な数になる先達の名をすべて記念しようとしてきた者たちもあります。キリスト教会も、早い段階から、先達の名をすべて記念しようとしてきたのです。個々の教会ごとに、そこに連なる先達の名をすべて記念しようとしてきたのです。初めのうちは、日曜日に集まるごとに、礼拝で聖餐の食卓に集まるごとに、先達の名がすべて読み上げられたと言います。それが困難になっていった時代、教会は、年に一度の記念のときを設け、すべての先達の名を記念するようになったのです。個々の教会の歴史が短い日本の教会では、今でも、その教会に連なる先達のすべての名を記念礼拝で読み上げて記念する習慣を続けているところが少なくありません。「名簿」の配布は、そのような習慣に倣ったものです。

そこで記念される先達の名を聞くとき、わたしたちは、その一人ひとりの地上の生涯を記念し、思い起こし、分かち合おうとしています。時間さえ許されるならば、そのようにすべきだとも思います。実際には、わたしたちの教会でもそれは困難です。「名簿」には、すでに 150 人近い先達の名が記されています。わたしたちは、ただ、記念礼拝の機会に集まり、それぞれの交わりの中で特に親しい関係にあった先達について分かち合うことができるだけでしょう。記念の機会に共に礼拝堂に集ってくださるならば、その分かち合いは、そのたびに広がりを持ったものとなるかもしれません。

そのとき、わたしたちは、おのずと、先達が生前、どのように地上の生涯を歩まれたのかを思い起こし、分かち合うことになるでしょう。残された者として、その先達の生涯に否定的な、あるいは批判的な思いを抱いていることもあるかもしれません。それでも、その先達が生涯の歩みの中で目指したものに思いを寄せることはできるのです。その目指したものに同意できるか、できないかは、関係ありません。人は皆、何かを目指して生涯を生き抜き、「天」に迎えられます。そして、「天」に迎えられたとき、その人は初めて、自分が目指すべきものが何であったのかを、全く知るようになるのではないのでしょうか。

先達に連なる

先達を記念することを通して、わたしたちは、今、地上の生涯のただ中にある者として、生涯の終わりに向けて目指すべきものを知るようにされます。多くの先達も、自分たちの先に生涯を終えた死者を葬り、記念することを通して、そうしてきたのです。先達の歩みを、ときに受け継ぎ、ときに見直し、しかし、先達の残していった地上の世界の中で、そのすべての重荷をも受けとめながら、自分の生涯を繰り返し定め直し、歩み直してきました。それが、わたしたちの記念する先達の生涯だったのでしょうか。そして、わたしたちもまた、そのように生きる外ない者なのではないでしょうか。

それは、しかし、大きな恵みなのです。わたしたちは、何も無いところから自分の生涯を歩むわけではありません。わたしたちも、先達の残していった地上の世界の中で、その重荷をすべて受けとめながら、ときに先達に倣い、ときに先達とは異なる道を選び、自分の生涯を定め直しては歩み直す。一世代前の先達よりも一世代分、多くの恵みを受け継いで、わたしたちは、自分の生涯を歩み抜く。そして、もう一世代分恵みを加えたものを、わたしたちは、後に続く者たちに残していくのです。

キリスト者として教会に連なる者たちは、その受け継ぐ恵みの中心に、主イエス・キリストの教えを据えてきました。「聖書」に記された御言葉から、主イエスの教えを繰り返し聞き直してきた先達の生涯を思い起こし、記念し、彼らの残してきた多くのものを恵みとして受け継ぎ、引継ぎ、そして、後に続く者たちに受け渡してきたのです。

主イエスの「山上の説教」を、その教えの中心と据えた先達が、初代教会の中にいました。今日の聖書朗読では、その「山上の説教」の冒頭部分が日課箇所となっていました。

主イエスの弟子たちもまた、主イエスが十字架で死んだ後に、そのご生涯を思い起こし、記念するところから、自分たちの生涯の歩み方を見直し、定め直し始めたのです。生前の主イエスの教え、その生涯を、弟子たちの教会は、「福音書」として記念し、後に続く者に受け継いできました。

「心の貧しい者は、幸いである。天の国はその人たちの者である。」

そう始められる「山上の説教」は、生涯を終えて「天」に迎えられたとき、その生涯を「幸いであった」と玉座にあるお方に告げていただくことを願って生きたすべての者たちが、代々、受け継いできたのです。その先達の生涯を思い起こし、記念してきた者たちは、「その人は幸いであった」と地上の生涯を終えた先達、死者を祝福してきました。

「彼の生涯は幸いであった」。その「幸い」を、わたしたちは、恵みとして受け継ぐことができます。先達に連なることがゆるされているのです。